宅野子ども神楽

・宅野子ども神楽は約300年途絶えることなく今も続いています。

・惣介さんという男の子がタブの木のまわりで遊んでいた時、突然神様が乗り移ったような踊りをやりだしたのが始まりと、言われています。（仁摩の郷ガイドブック p24・宅野散策ガイド p31・自作紙芝居）

・惣介さんが遊んだというタブの木の根が今も宅野久年に残っています。（宅野散策ガイド p33）

・宅野子ども神楽の「三番叟」「獅子舞」は関西から伝わってきた神楽だといわれています。（仁摩の郷ガイドブック p25・宅野散策ガイド p31）

・お正月の朝、正月を祝いながら宅野の民家を回り歩く神楽は獅子舞です。（宅野散策ガイド p32 他）

・宅野子ども神楽の演目「大蛇」の酒をつくるのは「もうしち」です。（石見神楽 p26）

・今は神楽衣装をつくる職人さんがおられる神楽衣装店があ

りますが、むかしは漁師さんの大漁旗・こいのぼり・着物などの古くなったものを衣装にしていました。今でも宅野で保管されています。

・約300年の歴史を持つ宅野子ども神楽ですが、ピンチの時がありました。今から約200年前江戸時代、宅野神楽が面白くないと人気が落ちてきました。その時の宅野の宮の宮司さんが奥飯石の神楽の良いところを宅野神楽に取り入れ、子どもたちに指導し復活させた、といわれています。これ以来子ども神楽はますます盛んになりました。明治以前のお侍さんの時代から宅野では、子どもが中心の神楽になったそうです。

もう一つのピンチは、今から70年前の戦中戦後。生活が大変で大人たちの心にゆとりがありませんでした。しかし、子どもたちになんとか楽しく正月を過ごさせてやりたい、子どもたちをすくすく育てたい、神楽が子どもたちの楽しみであってほしい・・・という思いの大人達が神楽の出来る環境をつくってくれました。この様に何百年も続けてこれたのは、宅野の人み

んなの応援があったからなんですね。（仁摩の郷ガイドブック p25・宅野散策ガイド p31）

・実は、大国にも神楽があったと言われています。戦争中に水害があり神楽道具が全て流されたために消滅したと言われています。何百年も続くというのはとても大変な事なんですね。宅野子ども神楽はすごい！

・江戸時代には、大森の代官所からも、宅野の正月神楽を見に来られるほどの公式行事（国家や政府、役所などに関わる行事）でした。

・今まで日本代表として、アメリカ・モンゴルの海外公演も2回参加しています。（仁摩の郷ガイドブック p27）

・上に書いた様に宅野子ども神楽の一番の特徴は300年途絶えることなく今も続いているということです。その他、大きな特徴は、正月神楽は子どもだけで取り仕切っているというところです。子ども達が自分達で衣装を付け合い、神楽を舞い、ほとんどの事を自分達でするのが宅野の正月神楽です。これこそ大人が入らない宅野子ども神楽です。2月11日の発表会は、練習を積んで大人の

指導(しどう)も入る「よそ行きの神楽」と言われています。(まちの伝統に親しもう、ポプラ社、2001年、p43・石見神楽ハーベスト出版2013年 p26)

・宅野子ども神楽の奏楽(そうがく)は六調子(ろくちょうし)である事も特徴(とくちょう)です。島根でも六調子(ろくちょうし)の神楽は一つか二つほど。ほとんどの神楽団(かぐらだん)が八調子(はっちょうし)のリズミカルなテンポの舞いです。六(ろく)調子(ちょうし)はゆっくり、ゆっくりとしたテンポになるので、舞うには体力(たいりょく)がとても必要(ひつよう)になります。(仁摩の郷ガイドブック p26)

宅野のお正月は、天狗(てんぐ)と獅子(しし)が新しい年を祝(いわ)い、五穀豊穣(ごこくほうじょう)(お米などが豊かに実ること)を願いながら正月三(さん)が日(にち)をかけて宅野の家(いえ)約 240 軒一軒一軒(いっけんいっけん)を回っていきます。夜になると、仁摩伝統芸能伝承館(にまでんとうげいのうでんしょうかん)に集まり三夜(さんや)続(つづ)けての正月神楽があります。毎年2月11日に発表会があります。(仁摩の郷ガイドブック p26・宅野散策ガイド p32・石見神楽ハーベスト出版2013年 p26)

・

・かつて夜の正月神楽は、宅野14地区が6～7 グループ

に分かれ家の土間（家の中の床のない地面のままの所）や納屋（物をいれておく小屋）で舞っていました。見る人が上、舞う人が下の座敷舞・見る人舞う人が同じ高さの納屋舞いと言います。今は子どもの数が減ってきたので一つに統合されています。そして、昔は男の子だけの神楽でしたが、平成５年からは女の子も奏楽に加わり、現在は舞い手にも加わっています。平成９年度からは、宅野地区だけではなく、仁摩町内の子どもも加わり受け継がれています。（石見神楽、ハーベスト出版、2013年 p26）

この様に昔はお正月のお祝い、五穀豊穣・・・を願う神楽でしたが、今は、伝えていきましょう・受け継いでいきましょうという伝統芸能になっています。

参考文献

仁摩の郷づくり委員会「仁摩の郷ガイドブック」・宅野歴史調査団「宅野散策ガイド」・島根県立古代出雲歴史博物館企画展「石見神楽－舞いを伝える、舞いと生きる－」2013年・千葉　昇　まちの伝統に親しもう2001年

仁摩の郷づくり委員会副委員長・宅野歴史調査団代表　藤間元康さん

のお話を参考にさせていただきました。